

山本敦久さん資料

排除と弾圧と抵抗するアスリート

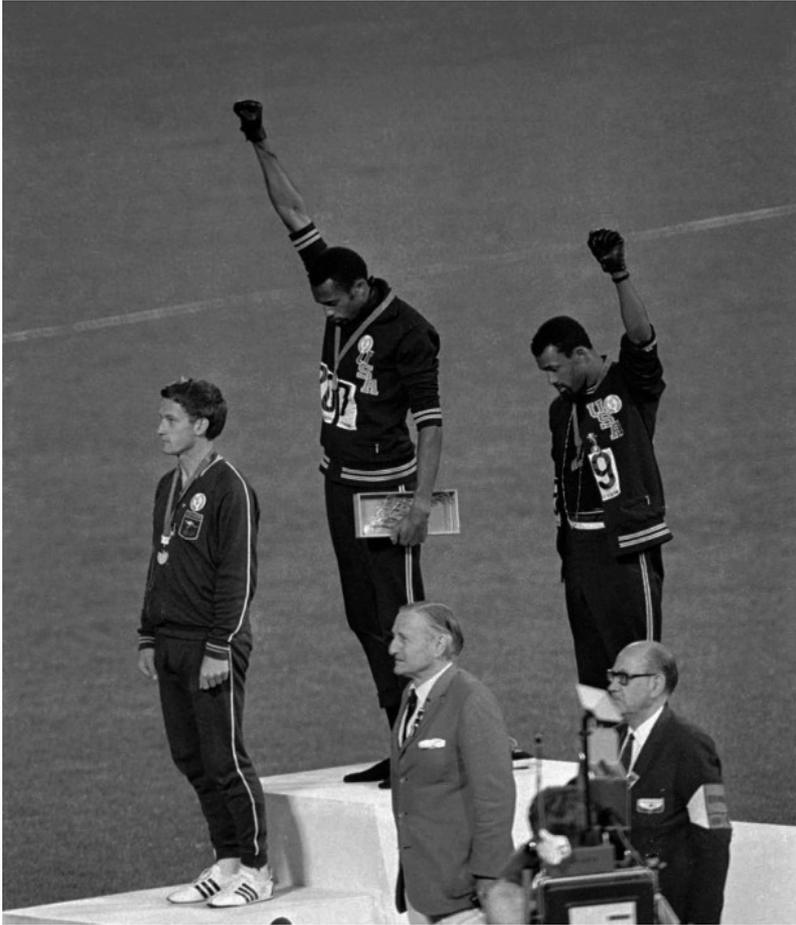
山本敦久(成城大学)

1. 『トラテロルコの夜——メキシコの1968年』(2005)、エレナ・ポニアトウスカ、北条ゆかり訳、藤原書店。

「メキシコ市は、オリンピックの表の顔を一年弱のうちにたちまち出現させた。スタジアム、オリンピック村、各種スポーツ施設。……しかし、選手を迎え入れる施設が続々と建ってゆく裏には、貧困、裸足の人びと、栄養失調で腹の腫れた子供たち、食べるに事欠く農民たち、これまでもこれからも忘れられた人びとにとって敵対的な社会とそれを横切る階級間の深い溝、どんな見せかけでも取り繕うつもり政府の残忍さが隠れていた。……第一九回オリンピック大会にどれほど莫大な費用をつぎ込もうとも、いずれは我々の利益に適うのだ、なぜなら資金を大事にしたい投資家は、「信頼できる安定した国」としてメキシコを選んでくれるはずだから。ところが……」(ポニアトウスカ、二〇〇五、p504-505)。

2. オリンピックメダリスト、ジョン・カーロスの言葉(Democracy Now!2011年10月12日より)

「メキシコ市は、大きな緊張とトラウマのなかにあった。一触即発の状態が続いていた。米国チームがオリンピックに行く前に、メキシコ市内で大虐殺が起きたのです。数百名の学生や若い活動家が殺されました。メキシコには貧困にあえぐ人たちがあまりにも多いという事実により我慢できなくなった人たちは、オリンピックで得た収益がどう使われるのか、貧しい者たちの援助にそうした資金が充てられるのかどうかを問題にしていたのです。当局は、オリンピック開催の場所を確保するために、貧しい者たちを立ち退かせようとしていたのです。あらゆる手段を使って立ち退きの命令がくだされたのです。多くの若者が瞬時に命を落としたのです。……大勢の若者が殺されました。遺体を炉に投げ込み、灰にしました。そこに入りきらない遺体は海に投棄されたのです。……メキシコに降り立ったとき、人びとの良心はすっかり眠ってしまっていると感じたのです。目を覚ますようなショッキングな出来事を起こす必要があると思いました。『こいつらはなぜ自分のキャリア、人生、未来を棒にふるまでこんなメッセージを表明しようとするのだろう』と問いかけざるを得なくなるような、あからさまな表現が必要だったのです」。



3.「アスリートたちの反オリンピック」(山本敦久)、『反東京オリンピック宣言』(2016)、小笠原博
毅・山本敦久編著(航思社)

「スミスとカーロスの身体政治は、トラテロルコ広場で貧しい者たちのために闘い、虐殺された学生や若者たちへの連帯を示してもいたのである。トラテロルコの虐殺には、祝賀資本主義(ボイコフ)の一形態であるオリンピックが必然的に内包している性質が現れている。この虐殺という出来事は、人類の繁栄や国際的な平和を訴えるスポーツの祝典が、軍事弾圧や過剰なポリシング、貧困、立ち退き、排除を伴わなければ実現しないということを実証している。ナチ五輪は独裁者がいたから特別なのではない。北京五輪は一党独裁だから特別なのではない。プーチンお墨付きのソチ五輪が特別なのではない。ロンドンやバンクーバーの立ち退きや排除が特別なのではない。祝賀を脅かすあらゆるものは排除される。祝賀を成功させるために、人権や法や秩序が宙吊りにされ、軍や警察が暴力によって貧しい者やマイノリティ、活動家、オリンピックへの批判者たちを弾圧し、排除するという仕組みは、すでにつねにオリンピック開催の方法のなかに織り込まれているのだ」。